園のおたより

第　５　号

令和７年９月

埼玉大学教育学部附属幼稚園

虫取り網

園長　関　由起子

今年の９月は、例年とは違う自然の姿を見せつけられました。猛暑はなかなか落ち着かず、９月 10 日に開催した「こども会」のテーマはお月見だったのですが、夜になっても気温が高く、お月見を楽しむには暑すぎるほど。毎年恒例で、こども会のために家の近くの土手からすすきを拝借していたのですが、今年のすすきは穂がほとんど出ておらず、カラカラに乾いていました。９月の中旬でも、元気に鳴くセミの声が聞こえてきて、地球温暖化の進行を肌で感じずにはいられません。

そんな中、園庭には例年通りたくさんのトンボがやってきました。赤、銀色、オレンジなど、色とりどりのトンボがひらひらと舞っています。実は少し虫が苦手な私ですが、無邪気に追いかけるこどもたちに刺激され、じっくりと赤トンボを観察してみたくなりました。

去年、丸めた紙の先にトンボが止まったことを思い出し、長い草の茎を立ててみましたが、うまく止まってくれません。バケツをかぶせて捕まえようと試みましたが、トンボの素早い動きに翻弄され、あっさり逃げられてしまいました。どうしたら捕まえられるだろうかと２組の A さんに尋ねてみると、「網で捕まえればいいんだよ」と、アドバイスがありました。網がないから今度 100 円ショップで買おうかなと話すと、A さんはきっぱりと「網は作るんだよ」と言い、段ボールでの作り方を熱心に教えてくれました。

こどもに教えてもらったのに、買った網で捕まえるわけにはいかないなと決意し、A さんに教わった通りに段ボールとガムテープ、ビニール袋を使って、なんとか自作の虫取り網を完成させました。さあ、いざトンボを捕まえよう！と思ったところで、残念ながらお片付けの時間に。この日の楽しみは翌日に持ち越しとなりました。

当園には、おもちゃ売り場にあるような既製品のおもちゃはほとんどありません。それでも、こどもたちはハサミ、のり、テープ、紐などを巧みに使いこなし、この世に一つだけの素敵なおもちゃを日々生み出しています。かつて、ハサミで A3 用紙をまっすぐ切ることすらできない大学生がいたことを思い出しました。生き抜く力の根源は、まさにこうした遊びの中にあるのだと改めて気づかされました。

後日、その自作の虫取り網は B くんの手に渡り、彼が園庭で元気に網を振り回す姿を微笑ましく見ていました。しかし、なかなかトンボは捕まらない様子。そんな時、B くんのお母さんが現れ、なんと素手でトンボをひょいっと捕まえたのです。そして、捕まえたトンボをこどもに見せ、すぐに優しく空へ放してあげていました。その見事な手さばきと、自然体でこどもと接する姿に、母の愛と強さを感じた忘れられない一瞬でした。

戦後８０年

副園長　小谷　宜路

毎年のように最高気温が更新される暑さが続いた今年の夏、第二次世界大戦の終戦から８０年という話題が多く聞かれました。戦争や紛争について、過去の出来事、歴史上の出来事として知ることから始めて、今の出来事、将来の出来事として互いに考え合うことへとつなげるきっかけを、こどもたちと共にもつことができないか、そのようなことも強く感じる夏でした。

幼少期からの私自身の夏を振り返ると、楽しい夏休みがやってきたという、からっとした陽気で開放的な雰囲気だけでなく、８月６日～９日～１５日など、自分が生まれる前の出来事や「いのち」の重みについてしっとりと感じる雰囲気の中に、身を置いて生活することが毎年あったように思い返されます。また、祖父母や両親などから話を聞いたことも強い記憶として残っています。戦後８０年となり、当時について語られる方から直接、体験を聞く機会も限られるほどの年月を経ました。日常は、「戦争」が遠いものとして過ごしている（過ごすことができている）日々ですが、現実の出来事として、８０年の間にも地球のどこかで争いがあり、現在も一つ一つの「いのち」の重みが、重みとして大切にされていない事実があります。

幼稚園の事務室前には、保護者の方向けの書籍コーナー「ふよう文庫」を置いています。こどもや子育てに関わる書籍のほか、絵本も複数あります。保育室にある絵本は、幼児期のこどもたちを直接対象としたものが中心ですが、ふよう文庫の絵本は、保護者の方が読んだり、お子さんとの会話のきっかけにしたりすることも想定しながら、選んでいます。今月は、戦争や紛争を題材にした絵本の作品をコーナーに加えました（『六にんの男たちーなぜ戦争をするのか？』『せかいいちうつくしいぼくの村』『戦争は、』『猫は生きている』『ぼくがラーメンたべてるとき』）。書籍のように長い文章ではなく、絵本として精選された文章と、絵のもつ力で、読み手がそれぞれに感じることができるように思います。大人とこどもが一緒に作品にふれることで、感じられるメッセージもあるかと思います。他にも、人の生活と歴史（『やとのいえ』『せいめいのれきし』）や、生き方（『ぼくを探しに』『おじさんのかさ』『うまれてきた子ども』）に関わる作品も、新たに追加しています。人の生き方、社会、いのちなど、考えたり感じたりするには、心のエネルギーが必要となるテーマですが、時には、幼児期から意識するテーマとして大切にしてほしいとも感じています。そして、私自身もこれらのことを大切に考えていきたいと思っています。

クラスだより

１くみ

「うれしいがいっぱいの秋」

大きなコブシの木からぽとりと落ちた実が季節の移ろいを教えてくれます。こどもたちは器をもって「ここにもあった」「ほらここも」とコブシの実を集めたり、砂で作ったケーキに飾ったりしています。近頃の朝は、「見て見て」と嬉しそうにするこどもの手には、ねこじゃらしやドングリや色のきれいな花が。「これね、道にあったんだよ」とか「きれいでしょう。木のところから落ちてきたの」と教えてくれます。爽やかな風を感じながらおうちの方と一緒に歩く道のりが、宝ものでいっぱいなのだろうと感じます。嬉しい実りに感謝しながら、暮らしていきたいです。

遊びも移ろいを感じます。室内では、はさみに興味をもった人が、おいしそうな色の紙を細かに切ってジュースを作りました。ジュースがいっぱいになると、カフェのイメージでお客さんを呼んで「どうぞ」と飲ませていました。また、クレヨンでおいしい味を付けた紙では、アイスを作り、それからアイス屋にして「くださいな」とお客さんが来ることを喜んでいました。作ることの面白さに加えて、イメージしたものを友達（お客）に渡したり、受け取ったりすることや、店員になったつもりで動くことにも面白さがあるようです。戸外では、大きなござを園庭のいろいろなところに運んで、キャンプのイメージで遊んでいます。バーベキューをしようと網を持って来たり、葉を集めたりして場をそれらしく作っていくことをよくしています。興味の近い人と遊ぶ中で、名前を呼ぶ姿も見られてきました。「〇〇ちゃん」と呼べることが嬉しいようです。呼ばれた人も嬉しそうです。相手の思いを届けたり受け取ったりする喜びがこちらにも伝わります。

お弁当の時にはおうちの方の話題が多いので「うちのママの名前はね〇〇なんだよ」「うちのお母さんはね、おかあさん！という名前なの」「うちのパパは〇〇さん。ダダンダンみたいに強いんだよ」「え！うちのママはコキンちゃんくらいに強いよ」という微笑ましいお話を楽しく聴かせてもらっています。今しか聴けない会話のひとつひとつを大切にしていきたいです。

２くみ

「初秋の彩り」

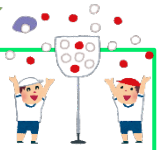
残暑が少しずつ和らぎ、秋の気配を感じる風が吹くようになってきました。9 月上旬は暑さのため戸外でたっぷり遊ぶことが難しい日が続いていましたが、時折コオロギの声も聞こえるようになり、季節の移ろいを感じます。2 組のこどもたちも進んで園庭に出て、草花や自然に目を向けながら遊ぶ姿が見られるようになってきました。

初夏に種を蒔いたヒマワリは、夏休みの間に立派な花を咲かせました。2 学期が始まってしばらくすると、家庭でもヒマワリの種を植えてみた人が「種が採れたよ」と教えてくれました。その方法を聞いてみんなで試してみると、本当にたくさんの種が採れました。たらいや容器にたっぷり入った種を見て、保育室にある絵本『そらの 100 かいだてのいえ』を思い出して嬉しそうにする人もいました。集めた種は家庭に持ち帰ったり、ごっこ遊びのケーキの材料にしたりして、自然の恵みをさまざまな形で楽しんでいます。

園庭や花壇には、遊びの中で使える植物が他にもたくさんあります。オシロイバナは毎年この時期になると、保育室前の花壇にたくさんの花を咲かせてくれます。水に入れて棒でつぶしてみると、桃色の色水ができました。ヒマワリと同じ時期にプランターに植えたアサガオは、9 月後半になって少しずつ花を咲かせ始めました。こちらも色水にしてみると、今度はきれいな青色になりました。そのほかにも、ミントやローズマリーなど、遊びの中で使える植物がたくさんあります。こどもたちは、遊びを通してさまざまな植物に触れながら、季節の変化を感じています。

昼食の時間には、机の上に小さな花瓶を置いて花を飾ることも始めました。食事の前に、毎日数人ずつ花を集めて、きれいに飾り付けをしています。それぞれが自分の感覚で彩りを考えながら花を選び、食卓を華やかにしてくれています。日々の生活の中で、自然の恵みや彩りを感じることを大切にしていきたいと思います。

３くみ



「悔しい気持ち」

長い夏休みを経て、さらにたくましくなった３組のみんなとの新しい生活が始まりました。クレーンゲーム屋さん、ケーキ屋さんなど、それぞれが夏休みの中で経験した出来事や１学期にしていたことから新しい遊びが生まれ、「明日はもっとこうしよう」と幼稚園で遊ぶことにわくわくしながら過ごしています。

厳しい暑さも少しずつ和らぎ、体を動かすことが心地よく感じるようになってきました。クラスみんなで体を動かす機会として新しく“追いかけ玉入れ”をやってみました。何度かやっていたある日、勝敗が決まった瞬間に負けたチームからこれまで聞いたことがないくらい大きな泣き声が聞こえてきました。勝ったチームの人は負けたチームの人がどうして泣いているのか分からず、困った様子でその人たちを見守っていました。落ち着いてから泣いていた人たちに話を聞くと「自分たちもたくさん入れたのに負けてしまったのが悔しい」という思いをみんなに伝えてくれました。それを聞くと、「かごの近くで投げたらいいんだよ」「いっぱい持って投げたら入ったよ」など、勝ったチームの人がたくさん入れるためのコツを教えてくれ、「次はもっといっぱい入れるんだ」と次にみんなでやることを楽しみにする表情に変わっていきました。

別の日に２組と一緒にやってみると、何度やっても一方のチームが負けてしまいました。そんな中でも、チームの人と玉の投げ方を考えて何度も挑戦しながら最後まで諦めず全力で取り組んでいました。最後に２組がやっているのを応援する時には、大きな声で「がんばれ」と同じチームの人を応援する姿があり、応援で力を貸したいという気持ちが感じられました。

負けたら“悔しい”という気持ちが生まれることもあることや友達のその気持ちに寄り添いながらみんなで考えていくことが、こどもたちの次のわくわくに変化していくのだと思います。相手がいることだからこそ、いろいろな気持ちが生まれたり、互いの気持ちに気付いたりしながら、遊びがどんどん面白くなっていくようです。勝敗にこだわって力を出したい気持ちや勝ったから嬉しいという気持ちに加えて、負けて悔しいという気持ちにも寄り添いながら、もっと面白くするにはどうしたらいいか、をみんなで考える時間を大切にしていきたいと思います。